

長与町立高田中学校 研究紀要

I 研究の概要

1 研究主題

「自分の考えを豊かに表現する生徒の育成」
 ～表現力向上に係る重点課題を改善する取組を中心に～

2 研究仮説

教育活動全体で意図的・計画的に表現活動を仕組み、表現への意欲を高めること、また、全教科等の授業において表現力向上に係る重点課題「自分の考えの根拠を明確にして表現する」ことの改善に有効な言語活動を適切に仕組み、生徒の主体的・協働的な学びを高めることができれば、自分の考えを豊かに表現できる生徒が育つであろう。

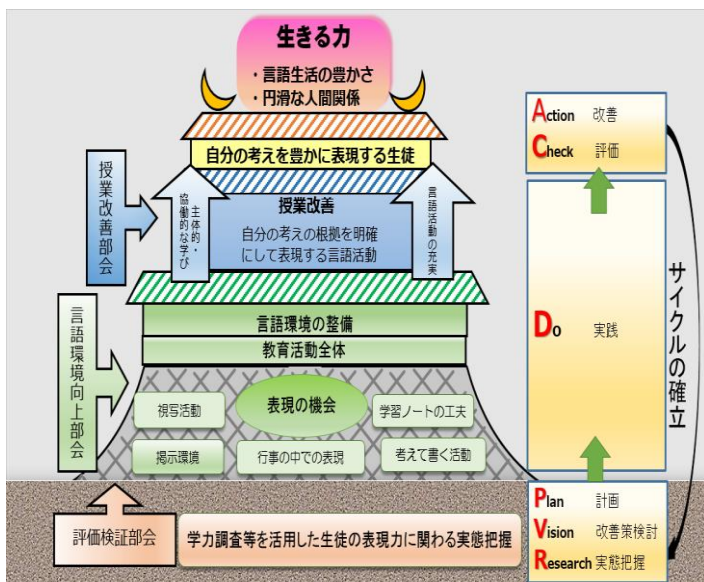
3 研究主題設定の理由

自分の考えを豊かに表現できることは、人間関係を円滑にし、日常の言語生活を豊かにすることにつながる。研究主題の追究に当たっては、表現への意欲と表現スキルの向上が重要になる。まず、表現することへの抵抗感をやわらげ、表現への意欲を高めるには、教育活動全体を通して自分の考えを表現する機会を増やすことだと考えた。朝の帯時間を使い、新聞のコラム等を視写する活動をはじめ、感想を述べたり、文章を要約し見出しを付けたりする活動を設定するとともに、表現力向上のために参考となる資料を生徒の目につきやすいところに掲示したりするなど、教育活動全体で自分の考えを豊かに表現できるための計画を立てた。「文章を書くことへの抵抗が小さくなった。」「自分の考えが相手に確実に伝わった。自信がついた。」といった表現への意欲の向上が、スキルアップを図る際の動きを強めると考えたからである。

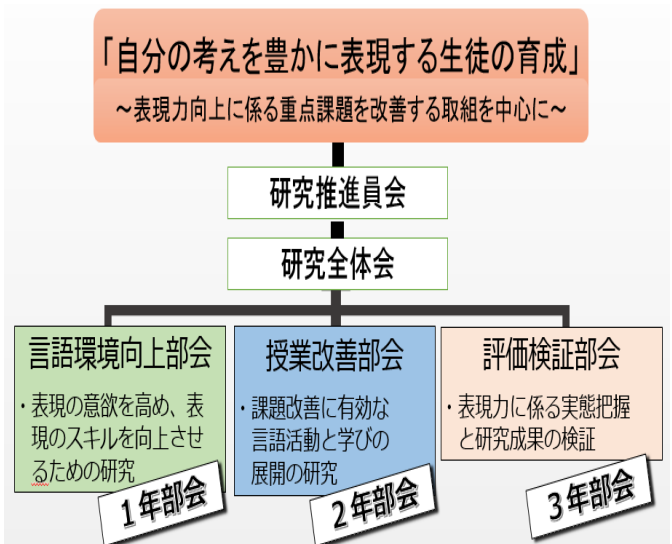
また、本研究には、表現力に係る本校生徒の実態把握、改善策検討、年間指導計画の作成、実践、評価、新たな改善といった R・V・P・D・C・A サイクルの確立が必要不可欠である。まず、国や県の学力調査、NRT 検査、日ごろの授業評価を活用して、表現力向上に係る重点課題の分析から始める。これらの分析から、本校の各教科の重点課題は「自分の考えの根拠を明確にして表現する」ことであると考え、その課題を改善するために有効な言語活動を、全教科等の授業において積極的に仕組む。併せて、学びの質を高め、表現力向上へ生徒が主体的、協働的に取り組めるように工夫する。

このように、表現への意欲の向上をねらう研究と、表現スキルの向上をねらう研究の両輪を円滑に回転させ、年度ごと確実に研究のゴールに向かう軌道に沿った研究推進が図られれば、自分の考えを豊かに表現できる生徒が育つと考え、研究主題・仮説を設定した。

4 研究構想図



5 研究組織



II 研究実践

1 言語環境向上部会（1年部会）

(1) 視写活動

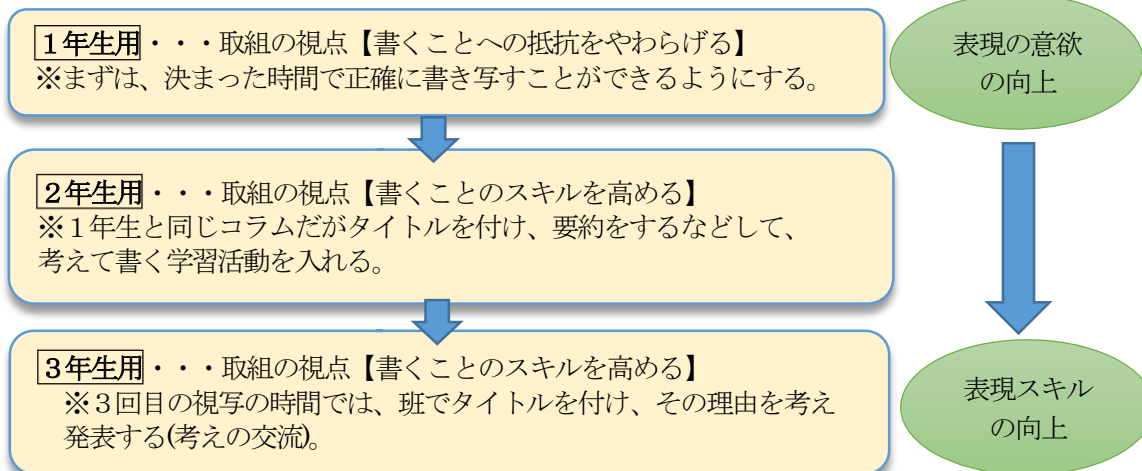


自分の考えを豊かに表現するために、表現への意欲と表現スキルの向上が重要になる。表現することへの抵抗感をやわらげ、表現への意欲を高める段階、表現スキルの向上の段階と、段階的に視写活動に取り組んでいる。

① 手順

手本	長崎新聞コラム「水や空」（タイトルは1年生のみ表示、2・3年は隠す。季節や時事に沿ったもの、思想が強すぎないものを採用）
手順	①5分間写す。②前回の続きから写す。③タイトルをつけ、要約・感想を書く。気になる言葉の意味を調べる。
添削	校長及び地域の教員OBが添削と所感の記入を行っている。

② 段階的な取組



③ 成果

1年生	2年生	3年生
書き写すスピードがアップした。全体的に取り組む雰囲気がよい。「次はもっと書こう」などという意欲が高まった。	コラムにタイトルを付け、内容を要約することを通して、まとめる力が付いてきた。	各々が書いたタイトルと理由をもとに、班で話し合い、よい考えを生かしながら、根拠を明確にして理由をまとめ、考えの交流ができるようになった。

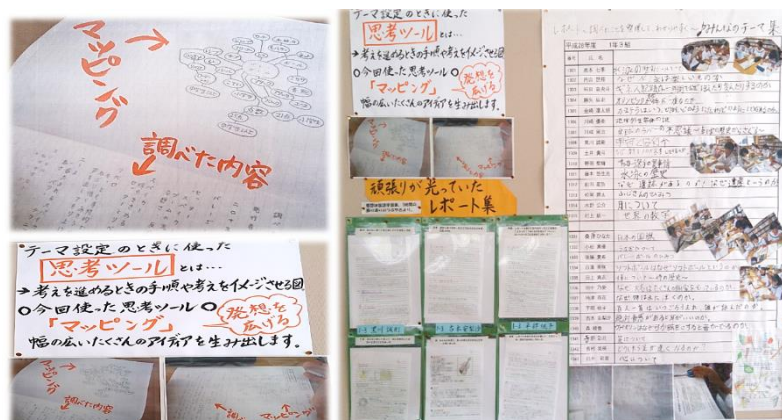
(2) 学習の手引きの配布

新入生向けに『学習の手引き』を配付し、授業への取り組み方や学習ノートの工夫などを取り上げ、生徒に活用させている。3年ごとに改訂している。



(3) 掲示教育

国語科の授業などで、三角ロジックやマッピングなどの思考ツールを用いて、自分の考えや思いを表現させるための工夫を行い、表現スキルの向上を目指している。また、これらのスキルを生かし、学校行事や季節に関わる生徒作品など、成果物は、校内掲示をしている。このように、表現の機会を増やし、教育活動全体を通して、言語環境を整備している。



2 授業改善部会（2年部会）

(1) 全教科共通の単元・題材構想のポイント、学習指導案の様式の策定

教科の壁を越えた授業研究を進め、表現力に係る重点課題の改善を図るため、授業づくりのものさし（全教科共通の単元・題材構想のポイント、学習指導案の様式）を定め、実践する研修を積み重ねた。

- ① 県教育センター出前講座 305 「中学校における授業づくりの基礎・基本『授業を磨く教師』を基にした学習指導案づくり」に準じた講義・演習（平成28年5月19日）

内容…本校の研究主題「自分の考えを豊かに表現する生徒の育成」を踏まえ、

ア「課題の改善に有効な言語活動の充実」

イ「生徒の主体的な学習の展開」

ウ「生徒の協働的な学びの展開」



の三つを学習指導案に反映させるための手だてについて理解が深まる講義・演習を行った。その後、研究部で『授業を磨く教師』（平成19年3月 長崎県教育委員会・長崎県校長会発行）、『授業を語り合うために～学習指導案集～』（平成26、27年3月 長崎県教育センター発行）を参考に、全教科共通の単元・題材構想のポイント、学習指導案の様式を定めた。

- ② 学校実態調査に合わせて、18名の授業者による学習指導案（略案）づくり（平成28年6月1日）

内容…①で定めたことの定着を図るため、18名の授業者が以下の点を考慮して（略案）を作成した。

- ・**単元名**…生徒の主体的な学習の展開につながる単元名とする。
- ・**本時の目標**…本時の主な学習活動・学びの内容・身に付ける力の三要件を盛り込む。「～の活動で、〇〇することを通して、□□することができる。」
- ・**検証すること**…表現力に係る重点課題の改善に有効な言語活動の設定、主体的・協働的な学びの展開など、本時の手だてとその検証方法を明記する。
- ・**評価**…確かな評価となる具体的な評価規準とA（十分満足）・C（努力を要する）の状況にある生徒への手だてを明記する。

(2) 教科の壁を越えたチームによる授業づくり

学年ごとにチームをつくり、教科の壁を越えて学習指導案を検討し、授業をつくりあげる。3回にわたる学習指導案検討会の詳細は次のとおりである。

● 第1回検討会「単元（題材）の大体を固める会」

本校様式—学習指導案「2 単元（題材）について」「3 単元（題材）の目標」「単元（題材）の評価規準」を検討する。（教科書、学習指導要領関連ページ、『授業を磨く教師』等の資料を準備。）

【検討項目】

- ・【**単元観**】単元（題材）の目標が明確で、本校の研究「自分の考えの根拠を明確にして表現する」ことに有効な単元（題材）なのか。
- ・【**生徒観**】単元（題材）で身に付けさせたい力に絞った生徒の実態をとらえており、実態は、関連する指導内容、観点、指導事項等の過去の評価記録簿やレディネステストの結果など、数値化された客観的なものになっているか。
- ・【**指導観**】課題となる事項の要因を探り、課題を改善するための有効な手だてを講ずるとともに、つまずきの予想ができていないか。
- ・本校の研究のねらいとする「自分の考えの根拠を明確にして表現する」を踏まえて、設定した言語活動が「自分の考えの根拠を明確にして表現する」ことを改善する有効で具体的な活動なのか。
- ・単元（題材）の目標と評価が一体化し、評価が確実にできる具体的な規準になっているか。

● 第2回検討会「単元（題材）計画を固める会」

第1回の資料と評価規準作成のための参考資料の関連ページを準備し、計画の妥当性、有効性を検討する。

【検討項目】

- ・単元（題材）の目標達成のために有効な学習活動を効果的に配置しているか。
- ・単元（題材）で設定した目標について、全員をB（おおむね満足）以上の達成状況にするための指導時間の確保を行い、適正な評価計画になっているか。
- ・評価計画は、記録に残す評価と指導に生かす評価を区別しているか。
- ・本校研究のねらい「自分の考えの根拠を明確にして表現する」の課題改善に有効な言語活動を単元内の有効な時間に設定しているか。

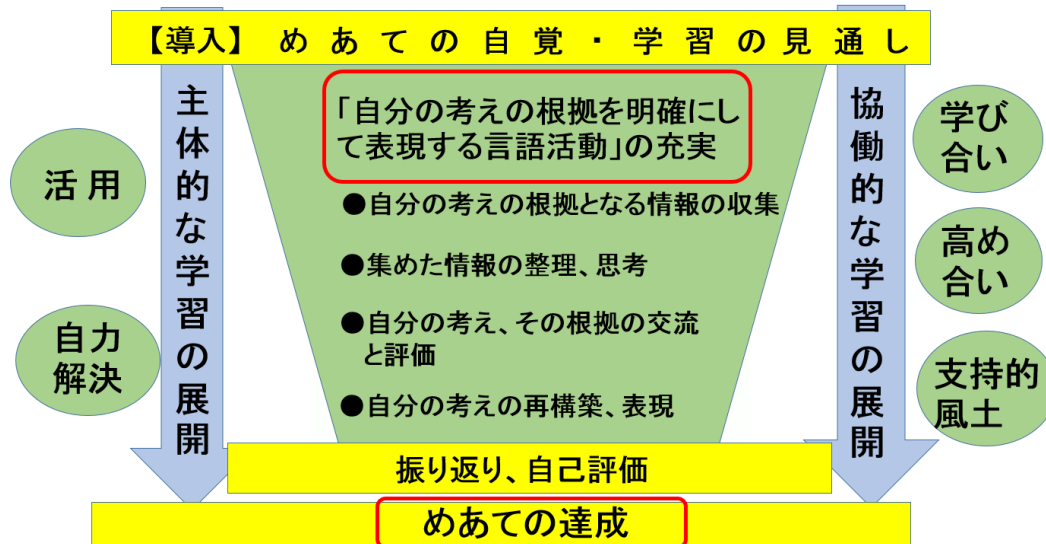
● 第3回検討会「本時を固める会」

第1・2回の資料と教育センター出前講座の資料を基に、本時の目標の妥当性を検討する。全教科共通として、設定した言語活動が、ア「自分の考えの根拠を明確にする」イ「考えの根拠をもとに、〇〇科にふさわしい表現の仕方では表現する」ウ「主体的、協働的な学びとなるように自分の考えを友達と交流し、再構築させて表現する」など、本時の言語活動が本校研究のねらいの追究に有効であったかどうかを検証の視点となる。

【検討項目】

- ・本時のめあては、本時に行う学習活動と本時のゴールとなる身に付けるべき力を明確にして、生徒の主体的な学習の展開につながっているか。
- ・教師の意図、生徒の反応の予想とそれに対応した教師の手だてを順序立てて構想しているか。
- ・A、B、C基準の生徒に対応した教師の手だてを複数立てているか。
- ・「自分の考えの根拠を明確にして表現する言語活動」を本時のねらい達成に有効な場面で設定し明記されているか。
- ・本時の目標の評価をどの場面、どんな方法で行うのかが明らかにされているか。
- ・めあてが示され、生徒の学びが構造化し、めあてに対するまとめが板書され、効果がある視覚的な板書計画か。

(3) 本校が目指す授業のイメージ



(4) 各教科に見る重点課題の改善状況

全教科等で「自分の考えの根拠を明確にして表現する」ことのできる言語活動を積極的に仕組んだり、各教科の定期テストで、「自分の考えの根拠を明確にして表現する」問題を出題したりするなど、研究成果を国や県の学力調査に限らず、日ごろの授業評価、定期テストの評価からも検証している。1学期末テストの結果からは、「根拠を明確にして表現する」問題の無解答率が減少している、「書くこと」に対する抵抗感が減り、表現力の向上が見られるなど、一定の成果が出ている。全体的に、無解答率の減少が見られ、自分なりの解答を書こうとする意欲の向上が見られる。書くことへの抵抗感がやわらぐといった段階を越え、根拠を明確にして表現する力そのものが向上した教科は、国語、社会、数学、保健体育の4教科。他の教科も授業における具体的な対策で今後一層の改善に努めているところである。

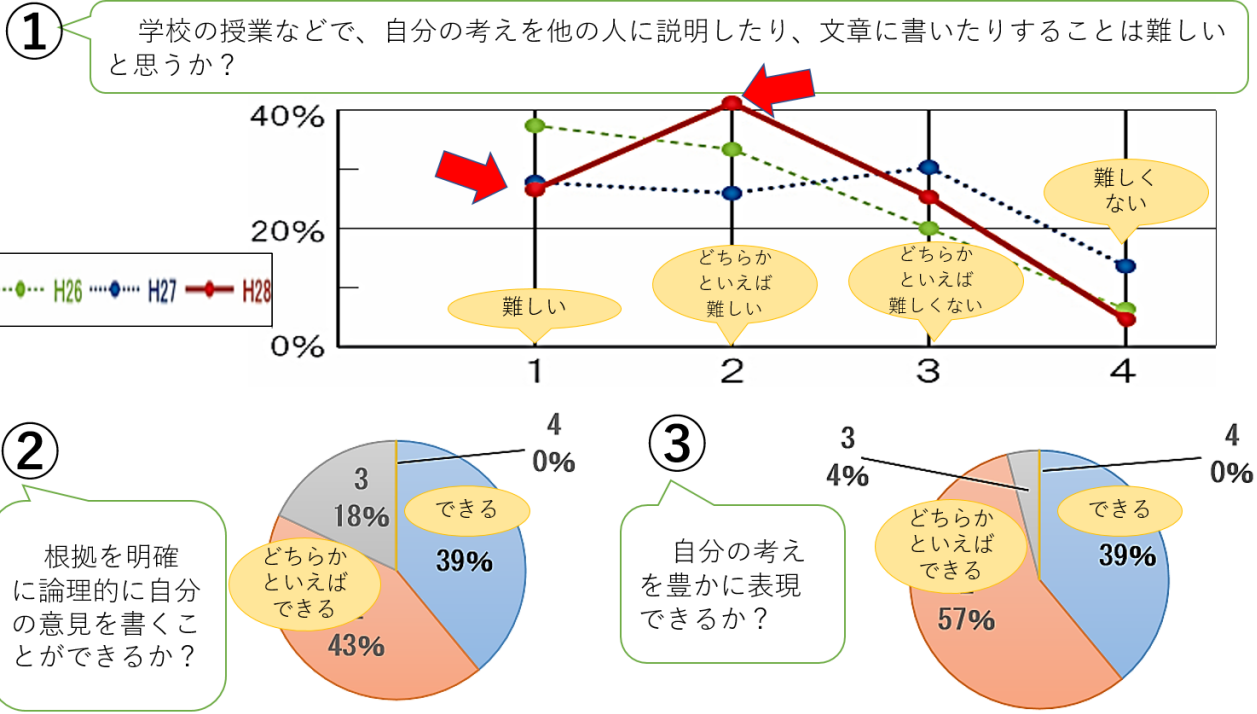
各教科で身に付けた知識・技能を活用して「自分の考えの根拠を明確にして表現する」学習を積極的に仕組み、確かな表現力の定着に結び付けたい。

また、教科の授業のみならず、総合的な学習の時間、道徳、特別活動、短学活など、教育活動全体を通じて、「なぜ?」「どうして?」の問いを大切に授業を展開し、生徒に自分の考えの根拠を明確にさせていくことを今後も指導していきたい。

3 評価検証部会（3年部会）

(1) 生活アンケートからの分析

本校では生徒の実態把握と生活向上への意識付けを行うために年に1回アンケートを行っている。「授業ではめあてが示されているか?」「自分の考えを発表する機会が与えられているか?」という項目では3年間、肯定的に答えた生徒が9割を超え、全職員の計画的・意図的な研究実践が成果となって現れた。本研究に関して意図的に表現活動を仕組んだことによる生徒の学習に対する意識の向上を以下に紹介する。



質問②、③のように、表現力が向上したと実感している生徒が増加しているにも関わらず、①で自分の考えを文章に書くことが難しいと感じる生徒が増えている理由は、全教科の授業や定期テストなどで、意図的に「自分の考えの根拠を明確にして表現する」ことを仕組んだり、様々な活動で表現活動が充実し活性化したことにより、表現の機会が増え、改めてその難しさを実感する生徒が増えたのではないかと捉えている。このように表現力の向上は図れているものの、全体の前で考えや意見を述べるなどの表現することへ積極的に取り組む生徒は固定化されつつある。様々な場を設定して、表現することの楽しさや充実感を味わわせたり、その表現方法を学ぶ場を今後も継続して意図的に仕組んだりしていくことが必要である。

(2) 全国学力・学習状況調査、県学力調査、NRT調査からの分析

①国語科 ・全国学力調査の比較と変化

年度	B問題	出題の趣旨	正答率
27年度	設問3	「複数の資料から適切な情報を得て、 <u>自分の考えを具体的に書く</u> ことができる」	32.1%
	設問3	「文章の構成や展開などを踏まえ、 <u>根拠を明確にして自分の考えを書く</u> ことができる」	30.9%
28年度	設問3	「文章の構成や表現の仕方について <u>根拠を明確にして自分の考えを具体的に書く</u> ことができる」	81.5%
	設問3	「本や文章などから必要な情報を読み取り、 <u>根拠を明確にして自分の考えを書く</u> ことができる」	74.1%

・長崎県学力調査の比較と変化

年度	B問題	出題の趣旨	正答率
27年度	設問3	「文章の構成や表現の仕方などについて、 <u>根拠を明確にして自分の考えを書く</u> 」	46.3%
28年度	設問4	「文章構成に留意し、 <u>根拠を明確にしてまとめの文章を書く</u> 」	80.3%

「根拠を明確にして書く」力が向上している。

②社会科 NRT検査の3年間の比較と変化(現3年生の経年変化)

【通過率】	学年	全国	全国比
平成26年(1年)	41%	44%	93%
平成27年(2年)	43%	35%	123%
平成28年(3年)	65%	60%	108%

「資料から考えの根拠となる部分を読み取り、自分の考えを記述する問題」の正答率が向上している。

③数学科 全国学力 前年度との比較

B 問題	出題の趣旨	H27年度 正答率	H28年度 正答率
1 (3)	適切な事柄を判断し、その事柄が成り立つ理由を <u>数学的な表現を用いて説明することができる。</u>	63.0%	81.4%
3 (3)	事象を数学的に解釈し、問題解決の方法を <u>数学的に説明することができる。</u>	35.8%	54.0%
5 (1)	資料の傾向を的確に捉え、判断の理由を <u>数学的な表現を用いて説明することができる。</u>	27.2%	69.0%

見通しをしっかりと立ててから証明する習慣を身に付け、合理的に証明する力が身に付いた。



Ⅲ 本研究のまとめ

1 自分の考えの根拠を明確にして表現する力の向上

研究主題の追究に当たっては、表現への意欲と表現スキルの向上を目指した。表現することへの抵抗感をやわらげ、表現への意欲やスキルを高めるために、教育活動全体で、各教科の授業で、自分の考えを表現する機会の拡大と指導の重点を図った。

ほとんどの生徒は、表現への抵抗が減り、表現することへの意欲とスキルが向上した。学力調査等の客観的な評価からも、自分の考えの根拠を明確にして表現できる生徒が増えるなど、効果があがっていることがわかる。

しかし、その一方で、スキルの向上が進まず、表現のための特別な支援が必要な生徒や、人間関係をうまくつくることができず、日常の言語生活を豊かにすることができない生徒が固定化されつつあるのが現状である。

今後は、本研究の取組について Check（評価）と Action（改善）を行い、RVPDCAサイクルの確立を図っていくことが大切である。

2 教科の壁を越えた学習指導案検討会

①研究授業を行うに当たり、教科の壁を越え、学年ごとに全3回に渡る学習指導案検討会を行った。

②6月の中間指導では、1年生英語科・2年生数学科・3年生美術科、本発表では、1年生数学科・2年生英語科・3年生社会科の指導案を検討した。

③県教育センターの出前講座、県教育委員会・町教育委員会中間指導で学んだことを生かした学習指導案づくりができた。

- ・自分の考えの根拠を明確にして表現できる有効な言語活動を仕組むにはどうすればよいか、学年職員で活発な協議ができた。
- ・授業のゴールを見据えた本時の目標は、『～の活動で、～を通して、～ができる。』の三要素を満たすようにした。
- ・「本時で検証すること」では、授業改善の柱に沿った内容にした。（「自分の考えの根拠を明確にして表現しているか。」「主体的な学びの展開であるか。」「協働的な学びの展開であるか。」）
- ・研究協議では、「本時で検証すること」ができていたかを中心に、学年ごとにマトリックスシートを使い、活発な協議ができた。

中学校は、教科担任制であるがゆえに、他の教科の指導にもものが言いにくい傾向にあり、当初は研究協議でもその傾向がみられた。本校は、職員がチームとして動いており、学年ごとに、職員それぞれが授業を想定して、活発な意見交換を行い、指導案を練り上げることができたことが最大の成果であった。